

文字文化財研究所の本年度活動実績と計画

文字文化財研究所長 丸山 裕美子

文字文化財研究所は、五年前の平成十九年度に、愛知県立大学文学部国文学科が中心となって設立した研究所です。平成二十一年度に愛知県立大学日本文化学部が発足すると、日本文化学部附置の研究所と認められ、大学の五つの公的研究所の一つとして、地域連携事業と共同研究事業とを推進する役目を担うことになりました。

研究所の構成員は、愛知県立大学日本文化学部、つまり国語国文学科と歴史文化学科の全教員です。それに、それぞれにすぐれた研究業績をもつ客員共同研究員の方々に加わっていただいています。本年度の客員共同研究員は、本学名誉教授の野崎典子氏をはじめとして、昨年に引き続き、山下達治氏、狩野一三氏、熊澤美弓氏、鈴木喬氏、さらに本年度は方国花氏を迎えました。方国花氏は、本学大学院博士後期課程を満期退学し、日本学術振興会特別研究員（PD）として研究に邁進しています。

客員共同研究員の熊澤美弓氏は、昨年度「白澤論」で博士号を取得され、本年度は、鈴木喬氏が「文字言語における体系と運用の諸問題―上代文字資料を中心に―」で、方国花氏が「古代東アジアにおける漢字文化の研究」で、それぞれ博士の学位を取得されました。若い気鋭の研究者が、文字文化財研究所の活動を支えてくれていて、頼もしい限りです。

さて、本年度の主な活動実績は以下のとおりです。まず、荻野検校顕彰会との連携による平曲の普及・研究活動の環境として、今年も六月に平曲鑑賞会（第十九回）を行いました。名古屋市西文化小劇場において、今井検校勉氏による平曲・祝言「桜」、平曲「生食」の演奏と、中京大学准教授徳竹由明氏による講演とが行われ、本学の学生三十六人が熱心に耳を傾けました。日本で唯一の盲人平曲伝承者である今井検校勉氏の演奏を、生で、しかも無料で聴くことができるのは、学生にとって貴重な機会であると思います。

つぎに、昨年度からはじまった高校教育の研修講座「県大講座 あゆち」ですが、今年度は八月十三日に愛知県立大学サテライトキャンパスを会場として、開催いたしました。国語以外に英語も、との昨年度いただいたご要望を受け、本学教職支援室の山本理絵室長、外国語学部池田周氏の協力を得て、今回は英語と国語とで実施することができました。県立惟信高校教頭織部秀明氏による「英語Ⅰで四技能をバランスよく伸ばす」と、県立碧南高校教頭伊豫田祥子氏による「構成に注意して評論文を読む」の二つの講演をいただき、英語・国語各二十人の参加で行いました。三月にももう一回行う予定です。現役の教員による実践的研修で、今後も継続して行っていきたいと考えています。

本学名誉教授尾崎光氏から寄贈を受けた国語学史関係の貴重書の整理も、昨年度から継続しており、その成果は、本誌前号の「文献目録(一)」に続き、本号に「文献目録(二)」として掲載されています。整理は今年度中に終了しますが、続いて、本学初代学長の故高木市之助氏の蔵書を受け入れる予定です。

別に、本学図書館所蔵の貴重書については、「稀書の会」が、継続して研究を行っており、その成果は本誌にも掲載されています。稀書の会は、国語国文学科の小谷成子氏、久富木原玲氏、歴史文化学科の大塚英二氏の指導のもと、本研究所客員研究員、大学院生、日本化学部学部生らが自主的に参加している研究会です。

また本年度は、愛知県陶磁資料館企画展「戦国のあいち 信長の見た城館・陶磁・世界」に、愛知県立大学も協力し、歴史文化学科の上川通夫氏を代表とする「大航海時代の戦国愛知研究会」が、第三展示部門「大航海時代の戦国あいち 十六世紀前後の日欧史料から」を担当いたしました。この企画展とも関わって、本年度本学公開講座は「グローバルとローカルの歴史世界」をテーマに開催され、講師は国語国文学科の久富木原氏、歴史文化学科の大塚氏、川畑博昭氏、井戸聡氏、山村亜希氏と私丸山、他に外国語学部の梶原克教氏、教育福祉学部の松宮朝氏も加わってください、参加者は八〇名を超えました。

最後に、前号で予告しましたように、名古屋博物館と共催で、東海地方の文字文化をテーマにした企画展を計画しています。来年度冬の実現に向けて、鋭意努力中です。ご支援よろしく願っています。